

平成 22 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520271
 研究課題名 (和文) アメリカにおけるアジア系移民の社会と文化の変遷-アジア系アメリカ文学を通して
 研究課題名 (英文) Cultural Transition in Asian immigrant Communities in the United States in Asian American Literature
 研究代表者
 野崎 京子 (NOZAKI KYOKO)
 京都産業大学・文化学部・教授
 研究者番号：90121540

研究成果の概要 (和文)：平成 19 年『強制収容とアイデンティティ・シフト：日系二世・三世の「日本」と「アメリカ」』を出版した。平成 20 年、移民の出身地と受け入れ地 (国) との比較分析をテーマにブラジルに出張、沖縄等の出自地を捉えてトランスナショナルに位置する「新日系人」やペルー日系人強制収容などを研究、その成果は平成 21 年 10 月、カリフォルニア大 (バークレイ校) での招待講演「日本と日系：太平洋環の繋がり」に提示した。

研究成果の概要 (英文)：In 2007, I published a book, “Internment and Identity Shift: Japan and the USA Through the Eyes of a Nisei and Sansei.” The highlight of my research in 2008 was a trip to Brazil. I tried to pursue the relationship between the countries (or places) that immigrants left and their immigrated countries. I presented the results of my research at a conference entitled, “Japan and Japanese America: Connections Across the Pacific Rim” at U.C. Berkeley in 2009.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：(1)アジア系アメリカ人 (2)日系人 (3)エスニック・コミュニティ (4)多様性
 (5)アイデンティティ (6)強制収容所 (7)文化変容 (8)トランスナショナル

1. 研究開始当初の背景

本研究は、前身にあたる平成 16、17、18 年度の「アメリカにおけるアジア系移民の社会と文化の変遷-アジア系アメリカ文学を通して」(課題番号 16520194) の継続である。

その研究成果報告書にも書いたように、本研究は新たに平成 19 年度から課題番号 90121540 として研究者が所属機関を退職するまでの 3 年間でメドに続行された。

従って、いかに述べる平成 18 年度の主な

研究実績が本研究開始当初の背景となる。

(1) 研究者自身が幼児期に收容されていた日系強制收容所 Tule Lake, California への巡礼イベント参加をきっかけに、收容所体験者やその家族のオーラルヒストリーを聞き取り調査を開始した。

(2) Freedom of Information 「情報公開法」によりアメリカ国立公文書館から谷川（研究者旧姓）一家の收容所と抑留所記録を入手した。

(3) アメリカで知り合った韓国系アメリカ人女性教授とのつながりから、韓国での世界女性学会議で発表した。同年、ベトナム系アメリカ人をアシスタントにベトナムへ出張した。これらを通してアジア系移民のルーツ研究の関連性を再確認した。

(4) 研究成果としての著書『強制收容と文化変容-日系二世・三世の日本とアメリカ』の原稿を脱稿し、編集に着手した。

2. 研究の目的

3年にわたる本研究の目的を各年毎に記す。

(1) 平成 19 年度

①『強制收容とアイデンティティ・シフの出版が最大目的。

②North Dakota 州のビスマルク（旧抑留所）への出張。ここでの目的は、旧敵性外国人抑留所の保存状況を見ることと、隣接する地域文書館での資料の検索であった。20世紀初頭から主にドイツ人を收容していたフォートリンカーン抑留所は、1960年代公民権運動の一環とも言えるマイノリティの先住民のための大学としてスタートした。大学のゲートを始めその他のレンガ作りの建物も、抑留所時代のものを保存しており、敷地そのものが「歴史遺産保存物」と残され、教室として使われている。著者は、外壁の一部に残された收容者の落書きを見つけた。その解釈は新たな研究へと結びついている。

また、州立文書館では、ネットで検索して、名前だけ知っていた地方紙の研究関連記事（收容所の外の一般アメリカ市民の生活や抑留者への感情や彼らとの交流等）を、興味深く読むことが出来た。

③2006年 NARA（アメリカ国立公文書館）から取りよせた谷川家（筆者の実家）全4人のファイルを考察する事。これらの書類と他の收容者たちの記録を比較分析する

事で、日系アメリカ人の社会の変遷が他のアジア系のそれと、どのように関連しているかを研究するのが、平成 19 年度からの研究目的であった。

(2) 平成 20 年度

前年度の③ファイル分析考察作業と平行して、当該年度は更にアメリカ合衆国以外の国、南米ブラジルの日系人に焦点を当てた。出身地（日本本土か沖縄など）の異なりと受け入れ地（国）の違いを比較分析する事で、日系アメリカ人の多様性やトランスナショナル的側面を捉えるのが目的。

(3) 平成 21 年度

戦前～20世紀末～21世紀初頭にかけてのアジア系（日系人など）のグローバルな進出、定着とそのコミュニティの変遷、他のエスニック集団との関係に焦点に当てる事が目的である。

60年代の半ばエスニック研究が多くの大学にアジア系アメリカ研究と言う新しい分野を開発していったが、バークレイ校や UCLA などの大学研究施設が、アジア系アメリカ人としてのアイデンティティを、個人にもまた社会にも認識させることに貢献していた過程も、追跡調査する。

3. 研究の方法

(1) 強制收容初体験者やその家族からの聞き取り調査、オーラルヒストリーが研究の主な方法である。公文書館から入手したファイル等で、その史的事実を確認しながら、多くの体験者が既に他界したり高齢にさしかかっている実態を鑑みて、可能な限り直接面談してインタビューをした。私的な事情に関わる事で、ジェンダーの問題等も含めて、研究者が更に学習する必要性を感じたので、2010年8月、カリフォルニア大学バークレイ校での研究者のためのアドバンスオーラルヒストリーワークショップに1週間参加する。

「口述記録」と訳される「オーラル・ヒストリー」は個人、企業や組織をインタビューしたものが元になってケースが多く、その利用価値と貢献には歴史資料として大きなものがある。何故なら、公表された結果が主となる文献資料から知られる内容には限りがあり、一般人の日常生活等文書が残っていないことが多いからである。また、当時は当たり前のこととしてみんなが知っていたことでも、年月を過ぎると全く分からなくなるということもある。

筆者は数多くの（有名、無名な）アジア系アメリカ人にインタビューを行ってきたことで、文献からは分からなかった様々なことが理解できたと思う。

筆者が1980年代に[オーラル・ヒストリー]に興味を持ったのは、ベトナム戦争の記憶を語る手段として集められた帰還兵の証言や回想録を聞いたことがきっかけだったように思う。退役兵によって紡がれる記憶のタペストリーはまた、ステンドグラスのモザイクのように一つずつ違った色、形、大きさのガラスのピースが構成する絵のようでもあった。光や明かりの当て方によって、今まで見えなかったものまでが、生き生きとその姿を表すという実感は、庶民のオーラル・ヒストリーにこそ納得出来た。

過去2、30年の日系人を中心とするインタビューをとおして、「歴史」が多くの人々によって紡がれ織られるタペストリーのようなものだということを感じてきた。その様々な糸の中には、鮮やかな色や強い牽引力を持って目立ったり、他の地味で引きの弱い糸の存在を余計に目立たなくするようなものもある。これは、ちょうど著名な作家やジャーナリストたちの声が、一つのマイノリティグループの声を代表しているように見えながら、実はそうではなく弱者たちの声を抑え、そのエスニックグループの代弁でないことが多々ある。インタビューをとおして、名もない一個人が[オーラル]語る[ヒストリー]歴史にこそ、真実があると、実感した。

(2) 日系人が旧移民・新移民さらに移民ではなく滞在者等多様で、かつ、生活や経済活動地が出自国を往復したりと多岐にわたるので、可能な限り現地に出張して、取材した。(沖縄、ハワイ、アメリカ各地、ブラジル等)その土地の風土、景色、そこで育った動植物、食材、調理法、儀式などが、現地でなくては、かげない匂いであり、味や食感である。

4. 研究成果

(1) 平成19年度

①「アジア系アメリカ学会」(ニューヨーク)による州公文書館への招待で中国系移民のアメリカ入国関連書類をスタッフと分析。[ペーパーサン](書類上での息子・すなわち不法移民)の存在が歴史文書の中に脈々と感じ取られた。

②ノースダコタ州ビスマーク(司法省管轄旧敵性外国人抑留所)へ出張、現地テレビ局に研究についてのインタビューを受け、全米に放映された。「現在のこの地の住民の殆どが、かつてここに敵性外国人収容所があったことを知らなかった」で始まるテレビのキャスターのナレーションが、現状を物語っている。そしてそこが同じような迫害を受けたネイティブアメリカンの大

学となっていることが、60年代のアメリカ公民権運動を具体化すると同時に、半世紀以上の時を経て、そこで日系人の著者がその地域研究をしていることを知ってもらえた。

③アジア系アメリカ文学研究会フォーラム(キャンパスプラザ京都)で「21世紀から見る日系人収容所体験」のパネリストとして講演。この史実が決して過去のものではなく9.11同時多発テロ勃発直後に見られた人種主義の復活やひろがりを考えるきっかけになったと自負する。

(2) 平成20年度

①前研究実績報告書ブックレット作成。

②日本アメリカ学会(同志社大学)アジア系アメリカ人研究分科会担当。

③同学会ラウンドテーブルでコロンビア大学と沖縄大学の研究者と研究討論。

④ブラジル日系人移民100周年ふるさと巡りでブラジル出張。多くの若者が父母が移民として出てきた国へ逆移民するというトランスナショナルな動向を研究、グローバル「日系」の新研究開始。同分野研究では先輩の、後述のブラウン大学エスニック研究センター長、エベリン・胡・ジュハートのアドバイスが貴重である。

⑤ブラジル、ハワイへ多くの移民を送り出した横浜、沖縄等の資料館で資料検索。

(3) 平成21年度

①日本アメリカ学会(津田塾大学)アジア系アメリカ人研究分科会担当。

②ブラウン大学エスニック研究センターで客員研究員として「日米間外交史に見る東部アメリカ人社会とアジア系社会」の調査研究。ポースマスというアメリカ東部の小さな港町で、どうして外交調印が行われたのか、アメリカ初期移民、アングロサクソンとピューリタンたちがアメリカ合衆国の建設とその思想に大きく貢献していることは自明であるが、彼らは現実の今の「人種」[移民]問題をどう捉えるのかなど、退官高校歴史教師と共同研究をしている。

③アジア系アメリカ文学国際フォーラムで司会/コメンテーター。

④カリフォルニア大学バークレイ校(学術振興会主催)学会で招待パネリストとして「Internment and Identity Shift:」発表。

日本に積極的に関わろうとしている日系人知識人、政治家たちとの談話を通して、ここに見られるもう一つの日系の姿に新しい日米外交史仮説を模索している。

⑤「日系人戦時強制収容所：トランスナショナルな視点から」講演。(京都産業大学)

⑥ハワイ Waipahu Plantation Village Center で、4つの民族の1900～1930年初期ハワイ移民歴史と日系人移民史を比較調査。[弁当からミックス・プレートへ]プランテーションへの初期移民が人種、エスニシティの壁を超えて、食事を分けあつたように、「多文化社会」の歴史は長い。大学での担当講義[多文化社会]と直結している。

⑦『アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために』の共同執筆者として「記録と記憶の再生-真実を求めて公文書を読む」を編集。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① Kyoko Norma Nozaki, “Internment and Identity Shift : Through Transnational War Memory”, AALA Journal (アジア系アメリカ文学研究会), 査読有, 14 巻, 2008 年, pp. 19-28

[学会発表] (計3件)

- ① Kyoko Norma Nozaki, “Internment and Identity Shift : Through Transnational War Memory”, 学会 Japan and Japanese America: Connections Across the Pacific Rim, 2009 年 10 月 10 日, カリフォルニア大学バークレイ校 David Bower Center
- ② 野崎京子, “Identity Shift, Crisscrossing the Pacific”, アメリカ学年次大会, 2008 年 6 月 1 日, 同志社大学新町キャンパス臨光館
- ③ 野崎京子, 「21 世紀から見る日系人収容所体験」第 15 回アジア系アメリカ文学研究フォーラム, 2007 年 9 月 15 日

[図書] (計2件)

- ① 野崎京子, (共著 アジア系アメリカ研究会), 世界思想社, 『アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために』(印刷中), 2010 年
- ② 野崎京子, 世界思想社, 『強制収容とアイデンティティ・シフトー日系二世・三世の日本とアメリカ』, 2007 年, 233 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野崎 京子 (NOZAKI KYOKO)
京都産業大学・文化学部・教授
研究者番号：90121540

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：